

江戸時代の富士登山習俗—富士山表口の登山記・登山絵図を中心に—

井上卓哉

1. はじめに

富士山の登山は、富士上人とも称された平安時代末期の修験者、末代（1104～不明）が発端とされている。末代は幾度となく登山を繰り返し、山頂に大日寺、南麓に村山興法寺（現在の村山浅間神社）を建立したほか、山頂に一切経を埋経した。以降、末代の足跡を追って、多くの修験者が富士山中での修行をおこなうとともに、複数の登山道が整備されることとなる。さらに、各登山道は、それぞれ異なる歴史的展開を辿り、現在へと至っているが、いずれにせよこれまで富士山は数多くの登山者を集めてきた。こうした登山者によって記された登山記や道中記は、当時の富士登山の姿を知るための貴重な資料であり、江戸の富士講の隆盛によって発展した吉田口の登山道を中心にその存在が知られており、その分析が進んでいる。しかしながら、富士山表口登山道（現在の大宮・村山口登山道）について記された登山記の数は、他の登山道に比べて数が少なく、その実像については断片的にしか知られていないというのが現状である。そこで本報告では、これまでほとんど取り上げられることのなかった表口登山道における、江戸時代の登山記や道中を記した登山絵図の分析を中心に、当時の富士登山習俗について紹介を試みたい。

2. 登山記の解題

本報告では、以下の登山記および登山絵図の記述を中心に、富士山の表口を利用した富士登山の状況を明らかにするとともに、道中の習俗等について分析を試みたい。

①『東游日歴』（著者：羽倉簡堂 成立：天保9年（1838）写 所蔵：富士市立富士文庫）

著者の羽倉簡堂は、幕府役人で、文政6年（1823）から天保2年（1831）まで駿府代官を務めた人物。本書は、文政10年（1827）に実施した富士登山や伊豆方面を巡った際の紀行文。

②『富嶽行記』（著者：原徳斎 成立：文政11年（1828）自筆 所蔵：富士市立富士文庫）

著者の原徳斎は、江戸時代後期に幕府に仕えた儒学者。本書は、文政11年（1828）に母と友人2人の4人で諸国を巡り、富士山にも登った際の紀行文。

③「富士山禅定図」（版元：駿州吉原宿 発行：天明年間 所蔵：富士山かぐや姫ミュージアム）

④「駿州吉原宿絵図」（版元：吉野保五郎 発行：文政11年（1828） 所蔵：同上）

⑤「駿河国富士山絵図」（版元：村山興法寺三坊蔵 発行：江戸時代 所蔵：同上）

3. 登山記や登山絵図に見る富士登山

上記の登山記や登山絵図の分析から、以下の点において、当時の富士山表口からの登山に関する情報を取り上げたい。

- ① 富士山へ至る道中
- ② 登山道の整備
- ③ 山中の施設
- ④ 富士山に対する信仰観
- ⑤ 登山習俗（排泄方法・食事・夜行登山など）
- ⑥ 当時の気候状況

これらの情報とともに、各登山道の登山記を比較の俎上に乗せることにより、当時の富士登山の状況をより具体的に知ることが可能となろう。また、他の山の登山記との比較により、各山の登山の特徴を描き出すことができるのではないだろうか。